九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

吉本隆明とミシェル・フーコー : 対談「世界の認識の方法」を中心に

江藤, 正顕
九州大学大学院比較社会文化研究科

https://doi.org/10.15017/15967

出版情報：Comparatio. 2, pp.34-53, 1998-04-10. Society of Comparative Cultural Studies, Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

吉本隆明とミシェル・フーコー

――対談「世界認識の方法」を中心に――

江藤正顕

はじめに

外国という言葉は、吉本隆明にとって、かならず「外国」という括弧つきの言葉として用いられている。そしてこれは彼の「日本」と「外国」というものをそれほど自明な前提とはみなしていないことを示している。彼にとってそれらは対立関係にあるのではなく、また融和の関係にあるのでもない。吉本はいわゆる外国へ行こうとしない人間である。しかしそのことと「外国」に対する関心とには落差があり、むしろその落差の大きさこそが彼の「外国」に対する姿勢をよく表していると思える。そのような構えのなかにあって吉本がどのように実際に「外国」と遭遇しているのか、それをフーコーとの出会い、対談を通してここでは考察する。

吉本隆明（一九二四～）がミシェル・フーコー（一九二六～一九八四）と対談したのは一九七八年四月二五日、場所は東京である。そのさい対談の通訳をしたのは蓮實重彦であった。（『海』中央公論社、一九七八年七月特別号掲載）そしてこの両者初対面の場で交わされた議論は、主として、世界の全体性をいかに認識するか、ということであった。この対談は実際に現代日本の思想家と現代西欧の思想家との出会い

という意味でも画期的であったが、それだけにとどまらず、その後の両者の思想の展開にお互いが刺激しあったという意味でも注目されるべき出来事であった。ここでは吉本に力点を置きながら、彼のその前後の思想的変遷を検証する。吉本はこのときはじめてフーコーの思想に触れたわけではなく、それ以前に『情況』（一九六九）の「機能的論理の限界」という論文でフーコーを批判的に扱っている。そのことは後で再び取り上げることにする。

一、意志論の位相

この対談では二人ともマルクスとマルクス主義とを区別して論じていることはまず確認しておかなければならない。その上で、吉本は『言葉と物』（一九六六）でフーコーがマルクスは十九世紀的な思考の枠組みの中に入っていてそこから出るものではない、とあざやかに指摘したことに感心しながらも、同時にそれに対し異を唱えている。それはマルクスの思想の欠陥というものではなく、ヘーゲルの意志論の領域を排除せずに残していることに意味があるのだと言うように。そしてフーコーの思考法は歴史の因果律と全体性を否定するニーチェから影響を受けたものではないか、『言葉と物』において言葉や思想から意味の中心を捜すということを徹底して拒否する態度が示されていることは、原因と結果という概念は記号的な概念の水準でしか成り立たないというニーチェ、歴史そのものは偶然の出来事の連鎖であって、そこに進歩や法則性というものはないというニーチェの考え方に近いのではないか、と述べている。そして結論的に

はヘーゲルの意志論の領域を残すことで、マルクスの考えたような「社会の歴史法則」に接近できるのでは、というところを否定し去って、「偶然に生起する問題、原因も結果も連鎖もなくて起こってくる問題の無限の系列のなかで、ある系列を区分けしていくことによって、歴史あるひとつの捉え方をする」とフーコーは考えていると批評している。すなわち吉本においては、歴史の個々の事象を超えた世界の必然的な運動が想定されていて、それは、けっしてマルクスの強調して展開したようなかたちだけでは十分ではなく、ヘーゲルが描いたような「意志」の領域、（それはマルクスの言い方をすれば「上部構造」、吉本的の言い方では「幻想」ということであるが、）その部分をあえて残すことによって「歴史の法則」や「世界認識の全体性」というものを破棄せずに保持することができる、と吉本は考えている。そしてそれを始末しきっているという批判がフーコーに向けられているのである。

このような吉本の指摘に対してフーコーは、「意志論」を論じたショーペンハウアーに注目してその視点がニーチェに受け継がれていったこと、またそのニーチェが意志をめぐる西欧の伝統的な概念をくつがえしたことを挙げている。フーコーによれば、意志はライプニッツ的な捉え方をすれば「意志―自然―力」、カント的な捉え方であれば「意志―法―善悪」となる。ここでこの自然と法という伝統的な捉え方は、現実を見極めようとするための、いわば知的解読の原理、その意志を起点として意志と情念、真実と幻想というものが把握可能となるようなものとして捉えかえされることによって、単に意志の概念だけではなく知と情念と意志の関係そのものを覆すことになったと述べている。そしてこのような意志の問題をマルクスに接合して、フーコーは、「階級闘争」という今日ほとんど死語としてしか通用していない言葉をそのよ

うな視点から再び取り上げようとする。しかし彼はそれを「階級の社会学」として見ようとするのではなく、「闘争をめぐる戦略的方法」として論じようとする。すなわちその戦いはどのように展開され、何を目ざし、何を手段として演じられるか、ということが問題にされる。フーコーは、社会学者たちは「階級とは何か」という議論はあきるほど蒸し返してきたが、しかし誰ひとりとして「闘争とは何か」を検討したり究明したりはしてこなかった、と言うのである。

このやりとりの段階から両者はさらに権力ということを通して意志の問題を煮詰めていく。「あたかも歴史は、いつでも偶然のように、または理念の失敗のように出てくるのはなぜか」という問いのあとで吉本は、歴史の展開は偶然にしか左右されないという考え方には疑問の余地がある、と言う。ニーチェはそこのところの関連の詰めがまだ粗雑だったのではないか、と言うのである。そしてそれは、ひいては、フーコーの論における「歴史の偶然と必然の関係」についてさらに詰められる必要があるのではないか、というのが吉本からの質疑である。

ところで、吉本はアルチュセールやルカーチや日本のマルクス主義とも異なったところから階級概念について論じている。階級というものは、常に観念の問題と、現実的な社会的な問題の二重性をもつというように考えてきたと彼は述べる。そして一方でニーチェの権力意志による自然規定とエンゲルスのいう卑俗化された意味での自然状態の規定とはそれほど異なってはいないのでは、という指摘は、吉本自身の考えている意志の領域が、それらとは異なり、むしろヘーゲル―マルクスというところで語られていることを示している。ここで吉本の考えている自然というのが、ニーチェともエンゲルスとも違っていることは、

偶然と必然に対する考え方の相違となって現れる。吉本はこの問題についてつぎのように語っている。

吉本「偶然というものが無数に積み重なり組み上げられて必然が出てきているということであるし、また偶然という要素は必ずそのなかに必然という要素が見出されるとしますと、歴史はその偶然に支配されるか、あるいは必然に支配されるかというような問題に対しては偶然の積み重なりがどこかでその必然に転化していくその境界と範囲が確定されるならば、フーコーさんのおっしゃるように政治を貧困にするものとして始末してしまわなくて、マルクスの思想及び歴史的な予言は生きさせることができるんじゃないかとぼくは考えます。」[1]

フーコーはここで吉本の言う「境界と範囲」との確定ということを意志の問題としても捉え返し、その意志と組織ということの関係について、こう述べている。

フーコー「意志のいくつかの異なる水準というものは、分析されずに終ってしまうほかはなかった。革命というものの、闘争というものの個人的な意志は、他の水準の意志とどうかかわるかといった問題は、私にとっても残された重要な課題であるように思います。そして、まさに現在、その多様なる意志が、伝統的左翼による　闘争のヘゲモニーが破れた部分に噴出しはじめてもいるのです。正直にいって、こ

の問題は私の著作の中でも充分に究明されてはおらず、『知への意志』（一九七六、引用者注）において、国家権力の側からの戦略というかたちで、かろうじて言及されているにすぎません。おそらく、この意志論というか、その異質の水準の分析は、他のどの国にもまして日本で有効に機能するのかもしれません。」[2]

ここでは偶然―必然の問題と意志の問題が同時に語られているが、それは別個のことではない。偶然と必然の問題をさらに詰めていくことが意志の問題でもあるというようなあり方としてそれらは関係している。フーコーがその後たどった道も『性の歴史』（一九七六、一九八四）を通して、意志における関係性を論じることであった。そこではまたそれが国家というものとどういうつながりや関係におかれることになるのかということも問題に上ってきた。一方、吉本はこのフーコーとの対話から何を得たのであろうか。フーコーの思考は吉本の思考にどういう作用を及ぼしたのであろうか。それについて論じる前にまず、それ以前の吉本のフーコー観について見ておく。

二、「機能的論理の限界」

『情況』（一九六九）のなかに収められたもののうち「機能的論理」についての批判を吉本は、それの「限界」と「位相」と「彼岸」というかたちで展開している。そのはじめにあたるのがこの「機能的論理の限界」である。そこではアルチュセールとともにフーコーが批判されている。吉本はまずフーコーのいう「体系（システム）」という概念を吟味して、それは自分の「共同規範としての言語」と類似するが、しかしフーコーが「この思考以前の思考、あらゆる体系に先立つこの体系を明かるみに出すこと」が哲学をはじめとする理論的学問の任務だとするところでは、それは自身の「共同規範としての言語」という概念と大きく隔たるものであるという。吉本はフーコーのように「体系」を明かるみに出すことではなく、「体系」に新たなにかをつけくわえることが重要なのだと考えるのである。つまり無名の思考、主体なき無人称としての体系を解明することではなく、「この思考の結果として、のこされた無人称の共同的な規範に、その都度くわえられてゆく個々の主体のちいさな創造の斧のあと」を残していくことが、むしろ、哲学やあらゆる理論のなすべきことであるという。

この議論の背後にはじつは吉本の幻想論が展開されていて、単なるフーコーへの一過的な批判にはとどまっていない。この批判の出自は吉本の思想の根幹をなす部分からなされているのである。そのためそれはフーコーとの原理論的な場面でのそれにもなっている。ただしかしこの時期にはフーコーをはじめとする「構造主義者」たちの主要な著作が十分に翻訳紹介されていない段階なのでその範囲内でしか論じられないと、そのような現状に異議申し立てをしながら判断をやや留保しているが、それでも吉本の「体系」の捉え方の基本線はフーコーのそれとは異なるものである。そしてその差異のかなめは「体系」というも

のが有効性や均質性、機能性といった方向からのみ捉えられようとしている点である。その論理は同様の観点からアルチュセールにも向けられている。吉本はいう。

吉本「アルチュセールにおいて、マルクスはすこしも〈甦っていない〉。マルクス〈主義〉はいくらかでも〈甦る〉ようにみえるとしても。〈構造〉は、ここでは記号論理的な抽象の水準をもった仮象にすぎないようにみえる。たんに〈身体〉をもった具体的な人間が、この理論に現実的に登場しないから仮象だというわけではなく、〈構造〉という概念の抽象度と位相とがちょうど仮象の水準をもっているからである。[3]」

アルチュセールのいう「重層的決定（シュールデテルミナシオン）」という概念が吉本の「共同幻想の構成（ゲシュタルト）」という概念に対応するものとみなしているが、しかしその内実はまったくちがうものであるとも述べている。しかも興味深いのは、この論のなかで吉本は「関係の絶対性」という言い方を使いながら構造主義的な概念の欠陥を批判するのである。それは「マチウ書試論」（一九五四）でいわば論理的帰着として語られたものが、ここではそれをいわば逆から説明するように力点の移動が行われていることである。そしてその概念を覆すようなかたちで人間をふたたび取り出そうとしているのである。吉本は次のように言っている。

吉本「〈共同規範〉としての人間という領域では、人間は血も涙も倫理も反倫理ももちえない。ただ〈関係の絶対性〉が基準となりうるだけである。これは格別にそれ自体で不都合なわけではなく、いわば論理的な必然にほかならないのだが、ただ人間が人間であるという理由は、いつも〈共同規範〉をはみだす現実性のうちにあるという本質に背反するから不都合なのだ。」[4]

もともと個々の人間によってしかうみださなかった〈共同規範〉がいつのまにか転倒したかたちで、個々の人間の営為の側面は消去され、「体系」や「構造」が重要であるかのようにみなされていくというあり方がここで問い返されている。この点ではアルチュセールもフーコーも同様の思考様式を取っているというのである。すなわち機能的論理によって設定されたこのような概念の背後にあるのは〈有効〉性の「透明な無色な均質空間」であり、それは「無意味」ではなくとも「無価値」なものである。なぜなら「価値」は「空間の非均質性」なしには設定できない概念だからであるというのが吉本の考えである。「体系」や「構造」といった概念もこの機能的論理のうえに成り立つものであり、そこにはすでにはじめに基礎的な公理系が設定されている。このような「機能的論理」に対する批判は吉本がくり返し行うところであるが、そのことは後のフーコーと吉本の対談で議論となった「偶然」と「必然」の問題、「意志」の問題とつながっているものであり、それらを通して吉本はそこでも再びフーコーのなかにある体系（システム）論的な思考方法に対して異議を唱えているのである。

吉本自身しばしば体系的な思想家であるように言われるが、このフーコーとの対談にもあらわれている

ように、彼は「機能的論理」から導かれるような「体系」に対してはこれを一貫して批判している点ではむしろ体系的思想の批判者として現れる。しかし、かといって吉本は体系性そのものを否定しているわけではなく、その体系の位相そのものが「機能的論理」には基づかないということなのである。そしてそこの部分に絡んでくるのが「意志」の問題であり、また「偶然―必然」の問題である。これはまた彼が「行動心理学」や「サイバネティックス」という方法を批判することとも根拠を一にしている。「機能的論理の位相」では吉本は、心的行動と身体的行動のあいだにずれを生みだすことに、どんな意味があるのだろうかとしたうえで、「こういう問いに答えをあたえられないと仮定しても、このずれの拡がりと異質さによって、人間は、他の動物とはちがった高次な心身の機構の世界をつくりだしている、という〈事実〉をさしだすことはできよう。」と述べ、そこには意味というものに解消できない価値の存在を示そうとしている。これは言い換えれば、ベルグソンやフロイトが持ち出した問題に対して問題じたいを平準化させたところでのみこの「機能的論理」は〈有効〉であるのであって、それ以上でも以下でもないということである。

「機能的論理の位相」のなかで批判的に論じられている今西錦司も、また別の吉本との対談『ダーウィンを超えて』一九七八・一一）において、今西の、動物界における「棲みわけ理論」についてそれを「偶然―必然」の問題として取り出している。吉本はそこでも「なるべくしてなった」という今西の説明に満足せず、その部分はさらに理論的に詰められるべき問題ではないか、と主張している。このモチーフもフーコーとの議論と通底するものである。これは吉本の、人間とその社会や歴史の認識、すなわち「世界認識の方法」に深くかかわるものである。そしてそれは吉本において論理じたいの可能性の模索ともつなが

っている。というのは、ある現象を把握しようとするときそれを十分に捉えきれるような論理そのものが問い返されるべきだという考え方である。そして吉本の体系性への志向もそのようなところに基づいていると言える。フーコーたちがその前で判断を停止しているところを吉本は問題視しているのである。それは取りも直さず「意志」にかかわる問題であり、それゆえ吉本の幻想論が繰り出されている場所というものは、はっきりと「機能的論理」とは位相を異にするものであるということができる。方法論的に言っても、吉本は現在の自然科学の方法を普遍的であるとも考えてはいない。例えばそれは科学的方法を普遍化したところから超常現象を批判することも、また科学的方法を断念したところから超常現象を肯定することもともに否定するということにも彼の原理論の方法は示されている。

フーコーと吉本の思想的な関係は、実際の対談に先立って、吉本の方では十分とは言えないにせよ、かなり煮詰められたかたちでフーコーの思考方法への批判がなされていた。それが対談に際してもフーコーへのもっとも少なく本質的なものだけに絞りこまれた質問が投げられたのである。この吉本からの質問に対して、フーコーの方も即座に答えていて、それはフーコー自身にもこの問題が相当に考えぬかれていたことを物語っている。そしてここではフーコーは吉本に譲歩しながら、依然基本的には吉本が批判したような内容をくり返していると言える。が、ここにいたってフーコーはそれほど自身のこれまでの方法に固執しているわけでも、またその方法を普遍化しているわけでもない。反対に吉本の指摘に対し、それが今自分も気になってきているところだと、いうようにその思想を吉本の方へと旋回させようとしている。ただしかしそれが吉本の思考方法へとそのまま接近してしまうかというとそのようなことはない。むしろそ

のことは二人の立っている場所じたいの差異と断絶を際立たせるものになっている。

吉本は、フーコーの思考形式にはそれじたいの必然性あるいは不可避性がある、とみている。それはフーコーにとってはそのような方法を取らざるを得ないという歴史があるのであって、それを吉本がその歴史的文脈を取り去ったところで受け入れることはできないのである。それはまた逆に、吉本からフーコーの場合でも同様である。そのことを認めたうえで吉本はフーコーを批判しているのである。フーコーの死に際して吉本は「ミシェル・フーコーの死」という追悼文を書いているが、そこにはフーコーの『言葉と物』への高い評価と同時にそれに劣らぬ強度をもった批判が表されている。そしてそれは、このフーコーとの出会いが、その後の吉本の思考にも大きな変化を及ぼしていることをうかがわせる。フーコーと取り交わされた対話は、吉本の思想の根幹から提出され、それゆえその後も持続的に反芻され変容させられていったのである。[5]

三、偶然と必然

吉本はフーコーの死を「現存する世界最大の思想家の死」と呼び、そこでフーコーの思考が全体にわたるときの根本認識について、「絶対的に第一義」の解釈の言葉すら、どこにも場所をみつけられないとすれば、ただ往復運動を繰り返す言葉を生みおとしているほかないのではないか、というところに見、そのことを通して「摂理」や「決定論」や「信念」の体系とかかわりない世界認識の統一的な方法を見出してい

ったと考えている。吉本はフーコーのこのような方法がいかに画期的であったか、を自身が受けた衝撃をまじえながら述べているが、かと言ってフーコーのその方法をそのまま認めるというわけではない。フーコーの「世界は解釈されるためにあるのではなく、変えるためにあるのだというマルクスの方法は、十九世紀の時代の知的な構図のなかに、すっぽりとはまってしまう、まったく安全な思想にほかならなかった。」というところに衝撃を受けると同時に異論を唱えるのである。

しかしこのフーコーが掲げた「摂理や決定論や信念の体系」としての世界認識ではないような認識のあり方という方向は吉本によっても同じく強く探求されていくものとしてあった。それは例えば『〈信〉の構造』（一九八三、一九八八、一九八九、対話篇一九九三）というかたちでまとめられた宗教論集のそのタイトル自体にもうかがえる。それは単に宗教の領域の「信」について語っているわけではなく、より広くさまざまなかたちで現象する「信」にかかわって論じられている。それほど吉本にとってもこの「信」という問題は切実なものである。またここで使われている「構造」という言葉もフーコーとの対談で吉本が批判している「体系」というものと強い関係があり、それは単に「構造」の解明にとどまらず「構造」という概念の批判をも含んでいるのである。フーコーと交えた議論以降、「信」というものとその「体系」「構造」というものとをフーコーが行ったようにではなく、フーコーの方法自体を批判するかたちでみずから行おうとしている。

吉本とフーコーの「体系」に対する認識方法の違いは吉本の場合それがはっきりと自然科学の方法についても行われる点によく現れている。吉本がフーコーを批判するその論点はけっして歴史認識にとどまる

ものではない。先にふれた今西錦司との対談をもう一度振り返ればそこにフーコー批判との共通項が見出せる。吉本は人間の直立歩行に関して「偶然―必然」の観点からこう述べている。

吉本「なぜ人間が二本足で立つようになったか、それは立つべくして立ったんだよということでいいわけですけれども、それをかりに論理の言葉で偶然というふうに名づけるとしますと、その偶然というのは必然というものと別なんじゃなくて、いわば必然というものが絶対化たものを論理の言葉で偶然と呼んでいる。偶然というのはぽっとこちらにあって、そして必然というのは、なるべくしてなったというふうに別にあってというんじゃなくて、なるべくしてなったということと、偶然そうなったということとは論理として関連しているんだというふうにとりたいわけですよ。」[6]

これに対する今西の反論はこうである。

今西「私は、変わるべくして変わったということは、偶然、必然のレベルを超えていると思うんです。偶然と必然は同じ土俵での相撲を取っているんですが、それを超えている。／それともう一つは、五十億年ほど前に地球がはじめて誕生したんですが、これは宇宙を有限なものと見てますね。そうみる限りは、結局またどこかまで行ったら繰り返しがくるんやないか、そうすると、ニーチェの永劫輪廻みたいなものが出てきまして、いまここで私と吉本さんが対談していることは、また何億年かさきにもう一ペ

ん繰り返しがくるんじゃないか、という見方もできぬことはない。そういう見方が仏教にもあるらしいですね。それは別にええとも悪いとも、批判のかなたにあるわけですね。そやからこれは、人間の営為の限界を超えた問題じゃないかと思うんです。　それでなければ、人間が宇宙をつくる時期がくるか、そのどっちかにならざるをえぬと思うんです。」[7]

これに対して吉本は即座に自分はそうは思わないと答え、そのあと今西の自然観とニーチェの考え方との類似を指摘している。そしてニーチェとヘーゲル、エンゲルスの思想をめぐりながら十九世紀の西欧のそれぞれの思想に共通する自然観として、それらの基本にあるものは、自然あるいは自然状態というものどこに理想の原型を置くかで違ってくるのではないか、と述べそれらが絶対的に対立していないことを指摘する。むしろそれらはフーコーにしたがって言えば同じ思想的構図の枠内にあるということができる。そしてこう続けている。

吉本「ただぼくは、理性の可能性も論理の可能性も、人間の知恵の可能性というのも、ちっとも絶対的ではないが、よりよくなるだろう、あるいは、していくということはなんとなくあきらめがたいもののように思います。」[8]

このあたりにフーコーとは別の角度からの吉本の世界認識の方法とその方向が示されていると言える。

それはマルクスをも含めてこれらの思想にすっぽり同化されないような独自の思想を確立していこうとする吉本の「意志」の領域としても示されている。

「この本を読まずに現在の世界の思想を語るのは、どんな立場にしろ、読まない方がモグリだといえるのは、現存している思想では、M・フーコーの『言葉と物』だけだとおもう。」として、柄谷行人も小林秀雄も自分自身の本もそれを読まなくても何不自由なくやっていける、と断言するようなところに掛け値なしの自身を位置づけているが、これはフーコーの与えた思想的威力を十二分に感知しえたものの発言でもある。そしてそのうえで吉本はフーコーの主張する「体系」「構造」を明らかにするということが哲学の使命であるということについて異議を唱える。これは人間というものの認識の仕方そのものにかかわってもいるのだが、しかしこの吉本が差し出す異論はもっとも純粋な自然科学とよばれる数学においても例外ではなく示されている。それは数学者遠山啓についての文章で、フッサールのいわゆる「einklammern（括弧にくくる）」を解除してみせるということに該当する「内省」を介して「数や図形の集合の意識学ともいうべきものが＜構造＞の無限の上昇と事実や自然の世界とを結びなおさなければならない。」と述べていることとも関係してくることであろう。

むすび

吉本のフーコー認識とまたフーコー批判は、それじたいがさらに吉本の思想を大いに活性化させ、また

思考の新たな次元に導くものであった。事実フーコーとの出会いが吉本に、自身の思想「体系」の方法上の問題を明確に再確認させるきっかけを作り、フーコーの「体系」批判の方法をさらに批判することによって両者の位相の差異を際立たせ、さらに言うなら、それまで強く影響されてきたマルクスの思想自体そのものの相対化を促し、吉本がマルクス批判へ大きく踏み出す前提を作ったと考えられる。そしてそれはニーチェはもとよりヘーゲルに対しても向けられていくものであった。

このフーコーとの対談と前後して、今西錦司との対談、それに遠山啓についての文章を含めておよそ一九八〇年頃になされたものだが、それらはこの時期の吉本の関心が主にどこへ向けられていたかを物語っている。それは「歴史」や「科学」や「文学批評」にまたがりながら、「体系」というもの、「構造」というものがどのように認識されうるか、また「偶然―必然」というものがそのなかにあってどのように捉えられるか、その問題をその問題以前にとどめることなく煮詰めていくかたちで新たな場所に出られるという可能性を語るものである。しかもそれはフーコーと吉本がともに提出していたように「意志」ないしは「幻想」さらには「無意識」という領域の問題として、その文脈をいかに再構成し組み替えていくかという問題として現れてくることになる。

【注】

（1）「世界認識の方法」（初出『海』中央公論社、一九七八・七）三一五頁、単行本『世界認識の方法』一九八〇・六・二〇中公文庫版一九八四・二・一〇、『吉本隆明全対談集6』青土社、一九八

八・六・一一

（2）同右、三二一頁

（3）「機能的論理の限界」（単行本『情況』河出書房新社、一九七十・一一・二五）六〇―六一頁、初出『文藝』一九六九年五月号

（4）同右、五六頁

（5）このことについては、吉本隆明・樺山紘一「歴史・国家・人間」（『世界認識の方法』所収、『吉本隆明対談集6』「あとがき」、『マルクス　―読みかえの方法』（深夜叢書社、一九九五・二・十など参照。

（6）「ダーウィンを超えて」対談者・今西錦司（『吉本隆明全対談集5』青土社、一九八八・四・十八）初出単行本『ダーウィンを超えて』一九七八年十二月、二五五頁

（7）同右、二五五頁

（8）同右、二五八頁

【参考文献】

蓮實重彦「闘争の原理　―フーコー＝吉本対談に通訳として参加して」（『海』中央公論社、一九七八年七月特別号）

鷲田小彌太『吉本隆明論　―戦後思想史の検証―』（三・一書房、一九九〇・六・一五）

樺山紘一「『世界認識の方―』主体としての人間のゆくえ」（『國文學』學燈社、一九八一・三・二〇）
笠井潔「『世界認識の方法』　―〈思想〉の普遍性を問う―」（『図書新聞』一九八〇・七／二十六号、『吉本隆明ヴァリアント』北宋社、一九八五・一一・一五）
内田隆三「知の社会学のために―フーコーの方法を準拠にして」（『岩波講座　現代社会学5　知の社会学／言語の社会学』一九九六・一〇・二五）
吉本隆明『吉本隆明全集撰4　思想家』（大和書房、一九八七・六・一〇）「柳田国男論」（一九八七）「丸山真男論」（一九六三）「カール・マルクス」（一九六六）を収める。
吉本隆明『書物の解体学』（中公文庫、一九八一・一二・一〇）「ジョルジュ・バタイユ」「モーリス・ブランショ」「ジャン・ジュネ」「ロートレアモン」「ミシェル・レリス」「ヘンリー・ミラー」「ガストン・バシュラール」「フリードリッヒ・ヘルダーリン」「カール・グスタフ・ユング」を収める。
吉本隆明『共同幻想論』（角川文庫、一九八二・一・三一）
吉本隆明『マルクス　―読みかえの方法』（深夜叢書社、一九九五・二・一〇）
Foucault, Michel, 1961, *Histore de la folie à l'âge classique*, Paris, Gallimard, 1972.（M・フーコー『狂気の歴史』田村俶訳、新潮社、一九七五）
Foucault, Michel, 1966, *Les Mots et les choses*, Gallimard.（M・フーコー『言葉と物』渡辺一民・佐々木明訳、

新潮社、一九七四）

Foucault, Michel, 1969, *L'archéologie du savoir*, Gallimard.（M・フーコー『知の考古学』中村雄二郎訳、河出書房新社、一九八一）

Foulcault, Michel, 1971, *L'ordre du discours*, Gallimard.（M・フーコー『言語表現の秩序』中村裕二郎訳、河出書房新社、一九七二）

Habermas, Jürgen, 1985, *Der philosophische Diskurs der Moderne*, Frankfurt.（J・ハーバマス『近代の哲学的ディスクルス』三島憲一他訳、岩波書店、一九九〇）